

BUNGA KU 1994

# 文学 1994

日本文芸家協会編

さまごまな父・消滅

雪

シュザンヌ

赤い唇

幻日

骨の始末

天の一角

こえ

水の娘。浴みする女

風草

安部 公房

大庭みな子

清岡 卓行

河野多恵子

瀬戸内寂聴

田中 澄江

筒井 康隆

三浦 哲郎

金井美恵子

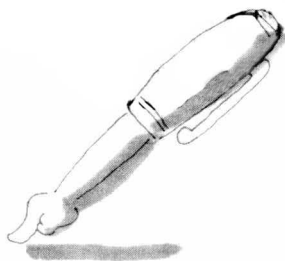
増田みず子

# 文学 1994

日本文芸家協会編

編纂委員

|       |   |
|-------|---|
| 秋山    | 駿 |
| 大江健三郎 |   |
| 奥野健男  |   |
| 菅野昭正  |   |
| 坂上弘   |   |



講談社

文学 1994

一九九四年四月二五日 第一刷発行

編者——日本文芸家協会

©Nippon Bungeika Kyokai 1994, Printed in Japan

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二—二—二一

郵便番号一一二—〇一

電話——出版部

〇三—五三九五—三五〇四

販売部

〇三—五三九五—三六二二

製作部

〇三—五三九五—三六一五

印刷所——豊国印刷株式会社

製本所——和田製本工業株式会社

定価はカバーに表示してあります。

本書の無断複写（コピー）は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは文芸図書第一出版部宛に願います。

ISBN4-06-117094-5 (文1)

まえがき

秋山 駿

平成五（一九九三）年度の傑作短篇アンソロジーである。

膨大な作品群の中から僅か二十一篇を選出するのは、なかなかの難事業であった。収録作品を多くしようとすれば、どうしても作品の長さが、短ければ短いほどありがたい。一同が揃ってこれは佳作であると認めるものも、百枚以上のものは見送られた。ところが、今日、作家が鋭意努力を集中するところは、中篇か連作形式の長篇であると見受けられる。二律背反である。そこにちぐはぐな感じのものが残った。

しかし、このアンソロジーは、今日の日本の文学の生きた姿はどんなものか？と問う外国人の読者、またカルチャー教室の女性や大学の若者に、これを読め、と言下に奨めるところのものである。

とにもかくにも、このアンソロジーは、文学の動向のみならず、日本的生存・生活・日常・

社会・時代、総体としての現実の流れを、一点からして観望せしめるものであろう。このアンソロジを、望遠鏡あるいは顕微鏡のように使えば、現実の実相および背後に潜在する動向そのものが、看取されてくるはずである。文学の読者には、日々新聞が伝える現実の鼓動より、こちらの方を信じていたきたい。

そこで、このアンソロジ、宙に浮ぶ二十一の星に似た作品についての断片的な印象を——背後に存在する膨大な星雲のごとき作品群の動向と一致しているか否かはともかく——以下に記す。

一望して誰もが発するのは次の声であろう。

——かつてこれほど「現実」というものが軽視されたことはなかった、と。

かつて小説は、現実の真形とはいかなるものであるか、を問い、われわれの目に明らかにしようという一つの方法であった。したがって、われわれの生存と現実とが直截に衝突するところに生ずる、奇怪な縛れを、探究しようとするものであった。

もっとも、単に「現実」といっただけでは、それは無意味であるというほどに、意味があいまいに拡散する。そこで、小説の問題として言い直す。それは、ふつうの人間のふつうの生活を、われわれが毎日繰り返しているところの日常のように、ふつうの時間と空間において捉えるものだ、と。そこから、リアリティとか写真、という感覚が発する。

で、そんな現実を主題とする小説の光景を求めてみると、三浦哲郎、岩阪恵子、司修、村田喜代子の四篇しかなかった。これらはいずれも、「節穴の面白いのは、むこう側にきまって明るい世界があることだった」（村田氏）式に、小説という節穴を通して、人間や現実の真形の一片を覗こうとするものであった。しかし、二十一分の四、という寡勢である。

では、どうしてそんなことになったのか。

第一は現実的理由。今日の日本の現実が、いわゆるふつうの「現実」として追求するためには、意欲の湧かぬほど安手な代物である、ということなのか。

第二は文学的理由。現実を、単に現実として追求するものは、もはやすべて書き尽されてしまっている。だから、おのずから小説は以前とは違った新しい道を進む。小説手法の三段跳びのような進歩の中にいる、ということなのか。

私見をいえば、現実というものは、昔も今も常に変わらず、太陽のようなものであって、これを直視するのは困難である。われわれの思考の内部においても、もはや心と物という二極発進では済まず、色の三原色のように、三極発進の考え方が必要であろうかとか、物質の構造を追求するためには、シンメトリーや結晶ばかりでなく、螺旋状のもの、あるいは基本的な四つの力を想定しなければならぬとか、いよいよ、謎を深めてくるものである。

小説の直面する現実も、そういうものであろう。昔から人間の精神が挑んでは跳ね返されてきた、巨大な化け物である、と思うとよろしい。

したがって、今日、現実を鋭利に切る短篇の減少は、日本の現実が現代化Ⅱアメリカ化されたために安手の代物になったのではなく、逆に、コンピュータの日常化がシンボルとなる情報化社会到来のために、巨大化し過ぎて、その小さな一片を捉えるためにも、三原色の思考や、螺旋状のものを見出す視法を導入せねばならず、そのための新しい手法の発明の困難ということが、作家に、現実軽視Ⅱ拒否の姿勢を執らせているのではないか、と思う。

これも私見ですが、こういう、現実を追求する小説手法混乱のときには、思いきって、あれこれを知的考慮を捨てて、現実を直視する、という出発点に戻ればいいのだ。

——単純なものに還れ。

それが、多くの、より多くの読者を相手に望む、小説という文学の地の塩である。

むろん、小説はなにはともあれ現実を原材料とするものだから、他にも現実を主題とするものが、数々あるが、私は次の作品を、前者とは異なった別の種類として区別しておく。

それは、現実を、社会的に意味のある出来事、あるいは、広くいつて事件として捉えようとするものだ。

その流れの一つは、時間軸に沿ったもので、自分史あるいは人生の回想といったスタイルのものになる。戦争、病氣、死、つまり、生における事件的なものが主題になる。

瀬戸内寂聴、田中澄江、古山高麗雄の作品が、そうであった。私はことに田中氏の描く光景

に驚いた。人生とはなんと、圧迫と鬱屈、屈曲の激しい沈鬱な光景に富むものであろうか。生の意味を理解しようとして、ついに神と悪魔を対立させるところに至っても、未だ何一つ解決してはいないのである。

もう一つの流れは、空間軸に沿ったもので、ほとんど地誌的といっていいようなある地方の風土、または外国の都市といったものが主題になる。光岡明、長堂英吉の作品がそれである。以上五篇。これらは、われわれが日々面接している日常的現実、それを逃れての、別のスタイルによる現実描写、という感を受ける。

さて、現実を写実しようとする以上の作品とは対照的に、いわば非現実への視線を導入して、今日的な生存の感覚を浮き彫りにしようとしているのが、大庭みな子、河野多恵子、増田みず子、田久保英夫、吉田知子、中沢けいの作品である。

現実とは、一様なものではなく多層性である。これを視る視点としての人間も、一人格ではなくて多重性である、というようなことが、根拠になっている。

今日、現実と、それを写実すると称する小説の関係（そのあいまいな関係）に、もっとも意識的な作家、あるいは、新鮮な感覚と精力的な意志を持つ作家が、鋭意努力を集中するところが、この分野であった。今日における小説スタイル上の全盛であって、多くの佳篇がそこから生じた。

以上六篇。これは冗談だが、性別を見ると、女五人の中に男が一人ポツンと混っているに過ぎない。日本の小説的文学とは、本来は女性の手に成るものではないか、という気もする。もっと根本的には、社会的現実に適応すべく訓練される男とは違って、女性こそ（子供を産んで現実に根を下すにもかかわらず）、非現実的なものへの志向を、本質的に抱いて誕生してくるのではないか、とも思われる。

ことに、私は河野、吉田氏の作品に感心した。そこには、日常的現実が仮象かもしれぬと感じさせる態の、背後に在る見えざる現実を、捉えようとする鋭い切り口を感じた。

面白いことに、それは、現実を直視しようとする作家の切り口と、同じものであった。

最後は、現実を描くのはまったく対蹠的に、非現実あるいは抽象的な光景を描くものだ。安部公房、清岡卓行、筒井康隆、金井美恵子、多和田葉子、椎名誠の作品がそれである。

ここの分野も、ちょうど無数の物を写す鏡の世界のように複雑多岐なので、三つに分類する。

一つは、知性が主題である。ものを考えること、そのことを小説化する。安部、清岡氏の作品がそうである。このジャンルが充分に稔っていない日本の文学にとっては、安部氏の死は手痛い損失であった。

二つは、描く対象よりも、むしろ話法そのものが主題であるような作品。金井、多和田氏の

作品がそれに当たる。

ただし、この二氏にも話法の差異がある。金井氏は、話法自体だけが確実な存在であるとし、その話法によって任意に、宙空に漂う人間や物のイメージを確実化するが、多和田氏はそれとは正反対に、その話法によって、これまで確実なものと思われていた人間や物を、任意に宙空に放り出された不確実なものへと、変換しようとするのである。

三つは、非現実的な視点に立つて、現実をからかおうとするものだ。筒井康隆と椎名誠がそれである。

現実離れの視点を採用することによって現在の日本の現実を撃つ。そんな姿勢によって、彼は、日本の戦後社会の暗点を撃ってきた。現実へのからかい、あるいは蜂の一と刺しは、小説の武器、または眠れる意識への夜の見張り人の役目である。しかし、彼の一と刺しが身心障害者への差別と受け取られて、彼が「断筆宣言」をしたのは、今日、周知の事実である。

現実をからかう、それが社会の急所の暗点に触れることは、未だタブーなのである。からかいを容れるべく、日本の社会がもう少し大人として成熟してほしい。

以上六篇。この流派の作品を眺めていると、一九五〇年代のアメリカの社会学者が、豊かな社会になって人口減少の時代を迎えるときには、困難と戦って自分の人生を確立する、という真面目な文学は廃れて、いわばSF的な文学が流行するであろう、と言っていたのを思い出す。

日本の文学も、ようやくそんなところに到達して、いましきりに懷疑しているところなのかもしれない。

現実とは何か。現実を描くとは何か。

また、日常生活と非現実、あるいは、抽象的なものと現実、その関係は何か。

私は、作家が、そんな問題を、とことん考え切つて欲しい、と思う。それも下らぬ批評家の小説理論に沿つてではなく、作品を産み出そうとする、作家の想像力に賭けて。

いまや、小説の未来は、ただ一人の孤独な部屋で盲目に努力する、一人ずつの小さな筆に賭けられているのだから。

# 目 次

さまざまな父・消滅

安部公房 7

雪

大庭みな子 17

シュザンヌ

清岡卓行 23

赤い脣

河野多恵子 40

幻日

瀬戸内寂聴 58

骨の始末

田中澄江 70

天の一角

筒井康隆 83

こえ

三浦哲郎 95

水の娘。浴みする女

金井美恵子 102

風草

増田みず子 109

|                        |         |     |
|------------------------|---------|-----|
| 光とゼラチンのライプチツヒ          | 多和田葉子   | 121 |
| みるなの木                  | 椎名 誠    | 133 |
| セミの追憶                  | 古山高麗雄   | 142 |
| 釘を打つ                   | 岩 阪 恵 子 | 159 |
| 薔薇の根                   | 田久保英夫   | 170 |
| 白について                  | 司 修     | 180 |
| 常寒山                    | 吉田 知 子  | 196 |
| 行ったり来たり                | 光 岡 明   | 215 |
| 十二のトイレ——鶏頭             | 村田喜代子   | 225 |
| 犬を焼く                   | 中 沢 け い | 233 |
| エンパイア・ステートビル<br>の紙ヒコーキ | 長 堂 英 吉 | 245 |

装幀  
下村哲也

文学  
1  
9  
9  
4

